

「はあ……これだから素人は。抽出方法が少し特殊なことしろうつとを知っているだけで味も知りもしないくせにアーだこーだと文句を言うのはやめたほうがいいわ。そういうのは値段と味を知った上でその価値を見出せる者こそが味わうものなのよ」

手に込めた力を緩めたかと思えば、腕を組んでため息を漏らす彼女。

申しあげてることまぎのは実質正論だし紛れもなくその通りで、まあそれはそうなんだけどクソはクソじゃない？
綺麗きれいなクソでもクソはクソじゃない？

つまり僕の命はクソ以下と？ おいおいクソみたいな話じゃない。

「で実際味はどうだった？」

「……………」僕は視線を落とし、テーブルに置かれた二つのカップを見た——二つは既に空だ。『めっちや美味しかった』

「でしょう？ コーヒーはどんなものでも飲むまで味は分からないものよ」

「むむむ確かに」唸る。実際これも間違っていない。

「というわけで私の解説を受けてみましょう。私の解説だつてそのコーヒーと同じよ」

つまりは知りもしないのに文句を垂れるなど。

「……………むむむ、確かに」また唸る。

というか正気になってみればこれ以上ないくらいのチャ

ンスが今舞い降りているのでは。

あしげ

足蹴にされたと言つても彼女の手料理がなければ僕は今

みちばた

頃道端でびしょ濡れになりながら息絶えていたわけで、死

んでいたようなものなのだから、彼女の要望の一つくらい聞かないと恩知らずにも程があるというもの。

しかも、そもそも彼女の言葉が万が一にも真実ならば、僕にデメリットはない。

いいことづくめともいえる。

……………。

結局僕は考えることをあきらめた。

「……乱暴にはしないでよ?」

そして僕は身体を彼女に向けた。僕の言葉を素直に受け

取っつけてくれたのか、彼女はゆっくりと手を伸ばし、僕の頬ほおに触れる。

驚くほどひんやりとした指先が、僕の背中をぞわりとさせた。

「大丈夫よ。すぐ終わるわ」

そして彼女は、指先に力を籠こめる。

直後だった。

青白いぼんやりとした光が、彼女の指先から滲にじみ、僕にまとわりついた。冷たい指先と、冷たい色合いのわりにその光は春の日差しのように暖かった。

僕をまんべんなく包み込んだ青白い光は、やがて、ぱちぱちと弾けて、小さな粒になつて消えていく。

泡のように、うたかたのように、彼女の言ったとおりあつという間の出来事だった。

暖かさは気づけば綺麗さっぱりなくなっていて、彼女の冷たい指先は、名残惜しそうに、僕から離れていく。

「……はい終わり」

そして彼女は何事もなかったかのように向かい側のソファに座る。

なんとというか、あまりにもあつけない終わり方だった。

「……あの、これで本当に祈りはなかったことになったの？」

「ええ。勿論」

「でもこれじゃあ呪いが解かれたかどうか分からないん

「だけど」

手から光を出したただけじゃんと言われればそれまでだし。どのような効果がもたされたのかも、僕には認識できなかつた。

「あら。それなら簡単よ」

けれど彼女は当然のように頷うなずいてから、くしゃくしゃになつた紙切れをポケットから取り出した。

僕が今日行くはずだつた怪しげな店——戒祈屋かいきリリエールの求人用紙が、そこにはあつた。

「そういえば自己紹介がまだだつたわね」
彼女は言つた。

「私の名前はリリエール。戒祈屋リリエールの店主よ」

そのように語った。

「あなた、うちで働かない？
とも。」

○